

## 心の栄養剤No109 【少し損をする生き方がいい】

元検事で元弁護士、田中森一さんの話は衝撃的だった。

盗みを働いた親をかばって嘘を付いた子供を正直者と言ったり、イソップ童話の「ウサギとカメ」の物語では、「寝ていたウサギはもしかしたら具合が悪かったのかもしれない。カメは『どうしたの?』と声を掛けるべきではなかったのか。正々堂々と勝負して、負けたらそれはそれでいいじゃないか」という話もあった。こんな発想は初めて聞いた。

論語の中に貫かれている「恕」の精神を、「思いやり」という現代風の言葉に置き換えて田中氏は説いていた。

また、聖書に出てくる「人にしてもらいたいと思う事を人にしなさい」というキリストの教えを、「西洋の積極的な愛だ」と言い、それに対して孔子の「自分がされたくないことは人にするべきではない」という教えは、「控えめで、消極的であるが、これこそが東洋的な思いやりではないか」と田中氏は言う。

そして、これまで欧米の人から欠点のように言われてきた「日本人は言いたいことを言わない」ということもまた「和を尊ぼうとする日本人の美德ではないか」と言うのである。

NHKの朝ドラ『花子とアン』にもこのことを想起させるシーンがあった。

時代は明治。山梨県の甲府の田舎にいた主人公のハナが、東京で仕事がしたいのに親を置いて家を出ていけないと悩んでいた。彼女のことが好きな幼馴染の朝市は、恋心を告白しようと彼女を呼び出すものの、ハナの悩みを知って告白できなくなり、むしろ上京することを勧めた。その時、朝市はハナにこう言う。

「一生懸命やって勝つことの次にいいことは、一生懸命やって負けることだ」

朝市という男は、ドラマの中ではイマイチぱっとしない役柄だが、その朝市に脚本家の中園ミホさんは前編90話の中で自分が一番言いたかったことを託したのではないかと思った。

負けることは、決して恥ずかしいことではない。大事なことは一生懸命やること。誰かに遠慮してやりたいことをやらずに人生を過ごすのは愚かなことだ、と。

そう言いながら、朝市本人は、結局自分の気持ちを伝えないまま、片思いの恋を終わらせてしまう。その控えめで、消極的なところに、見ている人は歯がゆさを感じるが、それもまた、ある意味、日本人らしさなのかもしれない。

改めて日本人の美德について考えてみた。

例えば、「少し損をする生き方」というのはどうだろう。これは熊本県の阿蘇で、自作農をやりながら、陶芸家として暮らしている北川八郎さんの言葉だ。

北川さんは、人生にも商売にも「繁盛の法則がある」と説き、その基本の一つは「与える生き方」と言っている。

与えるということは積極的な愛の実践だ。その生き方に徹していくと確かに人生も商売も繁盛するだろう。

しかし、北川さんは同時に消極的な与え方も提案している。「人に良きものを与えることができない人は少し損をして生きてゆくといい」と。

例えば、駐車場に車を止める時、建物の近くのスペースは高齢者や小さな子供のいる人に譲るために自分はわざわざ遠くのスペースに止める。

スーパーで食料品を買うとき、みんなが日付の新しいものを買うと古いものが売れ残り、廃棄処分されてしまうので、わざわざ賞味期限の近いものを買う。

商売でも、利益優先だと最小限のサービスしか考えないが、少し損をしてでもお客様の笑顔を第一に考えていたら、いつの間にか繁盛店になっていたという話は山のようにある。

「少し損をする生き方をしていくと対立と競争から抜け出し、生きていくことが楽になります」と北川さん。

控えめで、消極的な、少し損をする生き方を積極的に選んでみるというのは、極めて日本人の美德に適っているのかもしれない。

みやざき中央新聞より

歳を重ねるごとに年々、日本を日本人を好きに、誇りに思うようになってきている気がします。

海外などに出掛けて帰ってくるといつも・・・

「あ～日本人で良かった～日本に生まれて良かった」

としみじみ思います。

これからも「**日本人の美德**」に沿うような生き方～仕事を日々意識して過ごそう!!

ちなみに去年建てた倉光家の墓の真ん中には、私の大好きな「**恕**」という文字を入れました!!

